

ヒトの生活史のパターン

総合研究大学院大学 名誉教授／長谷川 眞理子

生物の生活史のパターン

生物が生まれてからおとなになって死ぬまで、その全行程がどのような時間で進み、それぞれの成長段階でどのように資源とエネルギーの配分がなされるのか、その全体を「生活史パターン」と呼びます。

たとえば、一年草の植物は1年しか生きません。その間に種子から芽が出て大きく育ち、花などをつけて繁殖して、死にます。ほとんどの場合、一年草はからだ小さく、小さな種子をたくさん生産して周囲にばらまき、その子が育つかどうかは運を天にまかせ、個々の子に対するエネルギー投資はほとんどありません。

一方、私たちヒトは、動物の中の哺乳類に属します。哺乳類は、雌が子を妊娠して体内で育て、出産してからしばらくはミルクを出して育てます。たいていの哺乳類は、1回に10匹以内の子しか産まず、哺乳をするので、個々の子に対する母親の投資はかなりになります(図1、イヌの生活史)。中でもヒトが属する霊長類は、おとなの体重が重く、一産一子で、子育てにかなりの投資をし、寿命も長い傾向があります。

普通の哺乳類のライフステージ



図1 イヌの生活史

ヒトは、おとなの平均体重が65キログラムほどで、哺乳類としてはかなり大きい方です。哺乳類は4500種ほどが知られていますが、ネズミやコウモリなどを思い浮かべると、普通の哺乳類がどの程度の大きさかわかるでしょう。と言うわけで、ヒトはかなり大型の哺乳類なのですが、潜在的な最長寿命は100年ほどと、とても長いのです。もちろん、人生の途中で事故にあったり病気になったりと、いろいろな死亡要因があるので、100歳まで生きるヒトは多くはありません。しかし、ヒトの抗酸化酵素の濃度その他、寿命に関連する生理学的な指標を見ると、潜在的にはとても長く生きるようにできています。からだが大きいかほど寿命が長くなるのは、哺乳類の一般的な法則ですが、その中でも、ヒトは長寿命なのです。

ヒトの生活史の区分

さて、それでは、ヒトの赤ちゃんが生まれてから大きくなるまでの過程はどうでしょう？これは、かなり特殊です。それを言えば、生まれる前の妊娠期間も問題です。ヒトの妊娠期間は、体重から推定する値と比べるとかなり短く、いわゆる未熟児の状態で生まれてきます。本来なら妊娠期間は今の3倍ほどではないか、などと言われています。お母さんにとっては、そんなのは冗談じゃないと言いたいところでしょうが、生物学的にはそうなので、ヒトは、生理的早産なのです。

こうしてヒトは、未熟児状態で生まれ、その赤ちゃんに対して母親が授乳します。生まれてから離乳するまでの授乳期間中の子を「乳児」と呼びますが、ヒトは、この乳児の期間も比較的短いのです。ヒトという生物が進化の過程で暮らしてきたのは、狩猟採集社会でした。現代では、農耕・牧畜・定住という生活様式が一般化した結果、ヒト本来の狩猟採集社会を行っている集団はほとんどありません。それでも、現代の国民国家の恩恵を最小限にしか受けておらず、哺乳瓶や離乳食などが整っていない狩猟採集民の人々はいます。その人々の暮らしを見ると、乳児である期間は、平均して2.8年なのです。現代社会ではさらに短くなります。ヒトにもっとも近縁な霊長類はチンパンジーですが、チンパンジーの離乳は4歳後半です。チンパンジーと同じ大型類人猿の仲間の離乳年齢は、ゴリラが3歳半、オランウータンに至っては8歳と、離乳までの乳児の期間は極端に長いのが普通です(図2、チンパンジーの生活史)。

チンパンジーのライフステージ



図2 チンパンジーの生活史

このように、ヒトは乳児期も短いと言えるのですが、離乳したあとの発達過程が、ヒトと他の類人猿ではまた違います。チンパンジー、ゴリラ、オランウータンの大型類人猿を含め、他の霊長類、いや他のすべての哺乳類では、一旦離乳すれば、あとは一人で食べていくのが普通です。離乳までの間は、親がいろいろとめんどうをみてくれますが、離乳したら最後、あとは一人で自立しな

ければいけません。何より、そのときには母親は次の子を妊娠して出産するので、次の子のめんどろを見るので手いっぱいになります。

では、ヒトでは、離乳したあとはどうなるのでしょうか？ここでもヒトは特殊で、とても自立はできません。ヒトでは、離乳してから性成熟が始まるまでの間を、「子ども期」と名付けます。子ども期は、3歳から14歳までの、およそ9年から10年です。これをさらに、3歳から7歳ごろまでと、7歳から14歳ごろまでとに分ける考えもあります。確かに、7歳ごろまでには永久歯が生えそろうい始め、おとなと同じものを食べられるようになり、手指で細かな作業をすることもできるようになるので、この時に小学校に入るというのもうなすけます。

そして思春期です。思春期は性成熟が始まり、おとなとして活動出来るようになるための準備期間と言えます。性ホルモンの作用が活発になり、親との関係も、友達との関係も、それまでとは異なって複雑になります。脳の発達で言えば、性ホルモンの影響で衝動性が高くなる一方、脳の前頭葉から情動への投影がまだ未熟なので、自己制御が十分とは言えません。その部分の脳の配線が完成し、いろいろな行動オプションを比較して感情を制御し、最適な行動選択ができるようになるのは25歳ごろなのです。そこで最近では、思春期は25歳までと言われるようになりました。

すると、成人期は25歳以降となりますが、狩猟採集社会の人々の暮らしなどを見ると、ヒトが身体的に活発に活動して高い生産性を保持していられるのは、およそ60歳までのようです。それ以後は、自分が食べるために必要な食料を調達する能力が徐々に落ち、他の若い世代の人々の余剰生産力に頼るようになります。

そして女性で顕著なのは、閉経という現象です。閉経は、女性の持っている卵子がなくなったことを示す現象で、だいたい48歳前後です。それ以後、ヒトの女性は妊娠が不可能になります。それでも女性の身体的能力は以後も維持されるのですが、こんなことは他の生物では

見られません。ほとんどの生物では、繁殖力がなくなったときに死に時です。生物学的に見て、それ以上、長く生きている意味はないからです。そこで、なぜ閉経があるのか、なぜ閉経後も女性は元気で生き続けるのかが、進化的に興味深い問題となります。

脳の大きさと生活史

これらもろもろの異様な点は、なぜ起こるのでしょう？ヒトの生活史戦略を特徴づけているさまざまな異様な状態は、ヒトの脳が極端に大きいことに起因しているようです。個々の種におけるさまざまな臓器の大きさは、全体的なからだの大きさに関係しています。からだが大きくなれば、各臓器も大きくなりますが、それは線形の比例関係ではなく、ある程度からだが大きくなったあと、臓器の大きさは頭打ちになります。これを、アロメトリー関係と呼びます。

脳の大きさもこの関係に当てはまるのですが、ヒトでは、およそ250万年前のホモ属の進化以降、脳が異様に大きくなり続けました。以前に比べて体重も少しは増えましたが、脳の大きさは、他の類人猿から見ればおよそ3倍になったのです（図3、真猿類の体重と脳重）。なぜこんなに大きな脳が必要だったのかと言えば、それは、複雑な社会関係に対応するためだったと考えられています。すると、そんな大きな脳を育てるための特殊な手だてが必要となり、それが、ヒトに固有の発達段階を築くことになったのだと考えられています。今回は、このあたりをもう少し詳しく見ていきましょう。

真猿類の体重と脳重
ヒトの脳は同体重の類人猿の脳の3倍

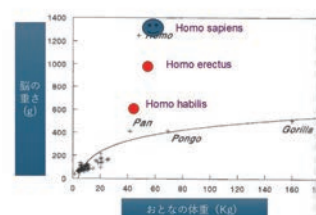


図3 真猿類の体重と脳重

Boggin (1999) Patterns of Human Growth

保育園・幼稚園
導入実績
No.1

株式会社 **ニシハタシステム**

園業務のお悩みを IP無線機 で解決します!

タレント・俳優
杉浦太陽

待機児童解消政策から 保育の質が問われる時代へ

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 **安家 周一**



最近まで待機児童解消をうたい文句に量の拡充を追求した事でたくさんの保育所や新規にこども園がつくられ、都市部では既存の幼稚園の隣に新設のこども園が設置されるなど、信じがたい状況が散見されています。園庭のない小規模保育所やビルの高層階につくられた保育所などもあって、標準11時間という、これまた信じがたい保育標準時間を過ごさなければならない子どもたちの生活や遊びが懸念されると同時に、保育担当者たちの苦悩も垣間見えます。これからは出生数の減少によって子どもの数は確実に減少するわけで、量の拡充を目的として作られた施設の行方やそこに投入された税金の意義を考えると悩ましい限りです。

子ども・子育て支援法設立以前は私立幼稚園の設置は都道府県の所轄で、申請に基づいて、各都道府県に設置される私学審議会で審議され、ある意味施設設置の質や適正配置が機能していました。おおむね450メートル離れていることや、近接園の園児充足率、園を取り巻く地元小学校の児童数などを根拠に判断され、過当競争が起こるのを避ける政策がとられました。その可否は置いておくとして、コンビニや薬局、美容院のように、教育保育施設の設置を市場の力学に任せるやり方に違和感を覚えるのは私だけではないと思います。

一方、国立教育政策研究所や様々な民間の組織が、保育の質評価スケールを検討していて、近いうちに「園や保育の質評価」が問われます。乳幼児期の教育・保育は園地や園庭、室内環境も非常に重要ですし、玩具や遊具、健康管理、食事の提供の在り方が問われます。保育で重要な質の要素は、園長の力量や学びの姿、保育担当者の研修状況、キャリアの形成なども質の評価に外せない要件です。

当機構では、ECEQ[®]を開発し、資格を持つコーディネーターがECEQ[®]実施の過程で園に寄り添い、実施園のスタッフが園の理念や保育活動について共有し合い、自らの保育に「問い」を立てたうえで保育活動を公開します。参加者から様々な意見をいただくことで、自らを振り返るという営みが、保育の質評価に値します。この保育の質評価に加え、今後は保護者からの評価や自治体の行政監査などの定型的な必要事項の達成を加えることも予想され、その全てが園の評価に値するものと考えています。

平成18年には保育者としての資質向上研修俯瞰図をもとに主体性をもって研修を受講し、履歴をハンドブッ

クやゆたかなまナビシステムに格納し、保育者一人一人の保育・教育の質向上の証明となるよう準備してきました。多くの先生方に対面研修やオンライン研修を受講いただき、着実に成果が蓄積されつつあります。この履歴は一人一人の保育者に帰属し、転居や結婚などで他園、地域に移動した際もその保育者の研修履歴として評価され、処遇改善などにも有効に利用される有益なものです。

昨年度に引き続き、8月23・24日と大妻女子大学千代田キャンパスをお借りして実施した対面での第15回幼児教育実践学会は、702人という定員満杯の状況で、盛会裏に開催されました。開催に当たっては、猛暑の中下支えいただいた東京、埼玉の幼稚園関係の皆さん、教育研究委員会のメンバー、事務室員の献身的な支えによって事故なく充実した時間と空間を保つことができました。会場をお貸しいただいた大妻女子大学の伊藤正直学長に感謝すると共に、関係の皆様方と共に心から喜びあいたいと思います。ありがとうございました。

例年学会の基調講演はもとより、口頭発表やポスター発表なども年を追うごとに充実し高度化しており、非常に興味深い継続研究もたくさん見受けられます。大学関係者も積極的に参加いただき、研究者と実践者の研究実績を蓄積するためにも、当機構理事の大学人をはじめとした研究者の方々にお知恵を拝借しながら「学会誌」の作成をおこなって参りたいと思います。

論文や研究発表には査読が必要となることから、幼稚園関係者の博士保持者や当機構理事の大学人にもお力添えをいただき、日本学術会議に認めていただけるような「学会誌」にすることを視野に入れて検討して参ります。

全国的に施設型給付園が増え、未だ十分とはいえる状況にはありませんが給付費や補助金が増額している現状があります。当然、税金の投入に関しては、外形的な法的整備や環境、教育の質的なエビデンス＝根拠が求められます。そういった意味でのパブリック（公共）な施設運営を証明する1丁目1番地は、やはり教育のトップリーダーである園長をはじめとした教職員研修の質と量が何よりも大切です。

当機構としては、教職員が主体的・自主的に学びが促進される土壌を耕し、正職教員をはじめ嘱託保育者やパートで働く保育者も研修を受講できる豊かな環境の提供が使命と心得ています。皆様方の一層のご協力をお願いします。



幼児教育の質向上とECEQ[®]～期待される役割と効果～②

前号より4回にわたって、ECEQ[®]に参加された学識者や行政の方から、ECEQ[®]に参加した感想やECEQ[®]に期待される役割・効果を執筆いただきます。幼児教育の質向上が求められる現在、その実現のために改めて園やECEQ[®]に求められることを見つめ直すきっかけとなれば幸いです。

ECEQ[®]は養成校教員も育てる場



四天王寺大学教育学部 准教授／田辺 昌吾

なにかを変えるには勇気がいります。長年培ってきたものなら、なおのこと。そもそも変える必要があるのか、今のままでいいのかを自分（たち）だけで考え、判断するには限界があります。日々の保育や園の運営についても当てはまることではないでしょうか。近年、「幼児教育の質の向上」について、その必要性が各所で叫ばれていますが、具体的にどうしたらいいのか、手立てが明快とはいえません。そんななか、「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム」＝ECEQ[®]は、その問いに応える非常に有効な手立てであると感じています。これまで縁があって、何度かECEQ[®]（STEP4の公開保育）に参加しました。以下、一参加者、一保育者養成校教員の立場で、ECEQ[®]の効果や今後の期待等について述べたいと思います。

ECEQ[®]の要は「問い」だと感じています。公開保育はともすると実施園が「見られる」側に固定化され、受身的にただ「やらされる」取り組みになってしまうことがあると思います。「やらされて」していても意味がないことは、日々の保育のなかで子どもたちの姿を通して実感されていることではないでしょうか。しかしECEQ[®]では、実施園の保育者の課題意識を「問い」として提示し、その「問い」を中心に公開保育や分科会での討議が展開されることから、実施園の保育者が「自分たちの公開保育」として、主体的に取り組めるようになっていきます。ECEQ[®]に参加して、実施園の先生方のいきいきとした姿はとても印象的です。だからこそ、「問い」をどのように生成するかが重要になってきます。ECEQ[®]ではこのプロセスにコーディネーターが寄り添い、ともに「問い」の生成を行います。コーディネーターの方から「問い」づくりの難しさや苦勞を聞くことができますが、それは「問い」が公開保育の質を左右し、実施園のための公開保育となるための鍵だからではないかと感じています。

この「問い」を通して、養成校教員としても多くの学びを得ています。現場保育者が日々の保育のなかでどのような課題に直面しているのかを知る機会になっています。単に課題を知るだけではありません。例えば保育室内の環境構成に関する「問い」を保育者歴1年目の先生と10年目の先生がそれぞれ設定していたりします。一

見ると同じような「問い」に見えても、配布資料での説明や分科会の討議等でそれぞれの経験歴に応じた「問い」の中身を知ることができ、新任期・中期・ベテラン期と、経験を重ねていくなかでの課題意識の広がりや深まりを学ぶことができます。これは保育者のキャリアパスの理解の一側面であり、養成校の学生を保育歴0年目のたまごと位置付けると、たまごが孵化し、その後どのように成長していくのかのプロセスを理解することは、たまごを育てる養成校教員にとって非常に重要です。ECEQ[®]を通してそのような学びがあることを実感しています。

また、「問い」を中心においた分科会での討議を通して、子どもの姿のみとりや保育の展開は一通りではなく、さまざまな見方・考え方が成り立つことを改めて知る機会になっています。そのことを通して、保育の多様さ、複雑さ、難しさ、おもしろさ等を実感しています。「私にはあの場面は〇〇のように見えたけど、確かに××のようにも捉えられるな」といったことが多々ありました。養成校教員はそれぞれに専門分野があるがゆえに、視野が狭くなってしまう恐れがあると感じています。保育は総合的な営みであることを考えると、養成校教員が保育に関する視野を広げる経験も大切ではないかと思えます。

上記のように、ECEQ[®]は養成校教員を育てる場にも成り得ます。「幼児教育の質の向上」のためには、養成校の質の向上も欠かせません。そのためには、まずは養成校教員がECEQ[®]に参加する必要がありますが、これからECEQ[®]を実施する園には是非近隣の養成校教員にも参加を促してほしいと思います。

「こどもまんなか社会」は、保育現場の貢献なくしては実現できません。その実現のためには、子どもたちのおもしろさや保育の奥深さを世の中に発信していくことが欠かせません。ECEQ[®]を通して、まずは身近な各地域の人々（自園・他園の保育者だけでなく、保護者や園関係者、自治体職員、養成校教員など）と対話することから、子どもをまんなかにしたネットワークを広めていくこともできるのではないのでしょうか。各地域で今後一層ECEQ[®]が根付いていくことを期待します。



令和6年度「ゆたかなまナビ」オンデマンド研修のご紹介

当機構では場所や時間を問わず保育者の主体的な学びを支援するためオンデマンド研修を配信しています。現在配信している計61コンテンツの中から講師の先生方にご紹介いただきます。

こどもの育ちと経験の理解

和歌山信愛大学教育学部 教授／大橋 功

こどもたちの日々の遊びには「楽しいね」「面白いね」と思うことがたくさんあります。こどもたちの遊びや日々の生活の動画を全国の園から集め、こどもたちが環境や遊びから何を学び何を理解しているのか、5つの視点（①先生の関わり②環境③遊びの発見④こども同士の関わり⑤こどもの気づき発見）で動画の記録から共同研究者として考えてみました。実践者の見取りや、要領指針や3つの柱、10の姿などから学びに向かう力をどのように仕掛けているのかなど実践を一緒に考えることができます。動画の内容をご紹介しますので共に学び、スキルアップに繋げていただければと思います。

①先生の関わり「5歳児ビー玉ころがし」

先生の声に注目してみると、「あー！残念！」「いくかな？」「おー！すごーい！」「あ、とまった！」「あれえ、どうすればいいんだ？」と、こどもたちの気持ちに寄り添った発言をしています。また、「うん、道を変えるのね」「コースを変えるのね」「ちょっと、ずらすのね」と、こどもたちの行動を言葉にします。こうした言葉のおかげで、こどもたちは「これでいいんだ」と自信を持って取り組めるのです。先生が受容的、共感的であることが大切ですが、それは、ただ自由に放置することではありません。こうした自然な見守りの中での「先生の言葉」が、安心して試行錯誤できる環境となっているのです。

②環境「雨の日の活動と遊び」

この活動は、二つに分かれています。ひとつは、真剣に自分の傘に絵や模様を描く活動です。「雨の日だって外で遊びたい」というこどもの自然な願いを捉えながら、こどもたちとの対話を通して、「自分の傘をつくりたい」という活動へ繋げていきました。もうひとつは、雨の中で傘をさして遊ぶことです。中々降らない雨を待ち続け、やっと降った雨の中で、ただ傘をさして遊んでいるだけでなく、ビニール傘を通して見える絵や模様と雨つぶが混じり合う様子を見ながら、遊びを通して自然と生活をしっかりと結びつけて楽しんでいるのです。

③遊びの発見

「どこまで掘れば抜けるのだろう？」「一体どうなるのだろう？」という問いが、簡単には抜けない根っこを掘る遊びの原動力になっています。こどもたちは、上手くいかないのに楽しそうです。楽しいから全力で遊ぶ。全力で遊ぶからこそ、感じる力、考える力、そして体力も、頭と心と体のすべてが育っていくのです。お家の中の遊び、与えられた遊び、お勉強だけでは育たないものが育ちます。

④こども同士の関わり

お友だちの帽子を取るために高い木に登った子、それを見て「危ないよ」と心配するお友だち。「登れるなら、降りてこられるはずだから大丈夫」と先生。「危ないからダメだよ」でもなく、放置するのでもなく、こういう機会を捉えて「危ない」とはどういうことなのか、自分のこととして、自分で考え、自分で判断する機会だと考える先生がいるからこそ経験が育ちに繋がっていくのです。

⑤こどもの気づき発見

汲んだはずの水が無くなっている。容器に問題があると考えて別の容器に入れようとするが今度は上手く水が入らない。まるでコントのようですが、困難の次にまた困難が、でもやりたいことがあるからあきらめない。こんな他愛もない気づきや発見の積み重ねが「どうすればいいの？」という問いを立て、根気よく改善しようとする探究的な態度が育っていくのです。

他にも様々な園での遊びを通してこどもが育っていく姿が紹介されています。

○高いところから低いところへと流れていく水の性質を活かして色水遊びをよりダイナミックに、楽しさが連続発展していくように工夫されています。さらに、触ったり見たりして感じる遊びが展開されていきます。

○こども達の本気を引き出すためには園内の環境もとても大切です。この園では、通りすがりに絵を描いたりつくったりできるコーナーがあちらこちらに用意されています。いまからはじめるよ、なんて入り口はありません。いつでもどこでも、はじまる遊びが仕掛けられています。

○一方、宝探しではこどもたちを遊びに導く入り口が仕掛けられています。基本は、こどもが自分で見つけ、問いを立て、探究する遊びを仕掛けることです。こどもたちがワクワクするような仕掛けは、そんなに凝らなくても、ちょっとしたアイデアで可能になります。

大橋功氏の研修コンテンツを受講されたい方はこちら

・申込期間：～令和7年2月27日(木)17時

・教職員登録のうえ、右のQRコードか
ゆたかなまナビより
お申込みください。



幼児教育の実践を豊かにし、幼児教育の有用性を社会に示す

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 教育研究委員長／岡本 潤子

幼児教育実践学会は、2010年、今から15年前にスタートした学会。その名の通り私たちの日々の「実践」が学会の柱となり、「実践」を基に参加者同士が語り合い、それが各園の園内研修の充実へとつながり、共同研究者と共に育ち合う場として、私たちの夏の大きな学びの場として成長してきました。15回目を迎えた今も、設立趣意書にある「毎日の保育実践活動が私たちの宝であり、保育の真実実践の中にあります。この実践活動に様々な角度から光を当て、実践者ならではの保育研究を、研究者と手を取り合いながら深めることこそ、豊かな保育活動の源」であることを誇りに、全国から702名の参加者を迎え、大妻女子大学様を会場に語り合いの時をもった二日間。

8月23日、第一日目の開会式では当機構の安家周一理事長からのご挨拶の後に、学校法人成増すみれ学園成増すみれ幼稚園副園長 持橋亜紀先生、学校法人木の花幼稚園園長 鮎川正先生、学校法人八郷学園エンゼル幼稚園園長 山川佳保里先生、学校法人内山学園あおば幼稚園副園長 土野智津子先生、学校法人常磐会学園幼保連携型認定こども園常磐会短期大学付属いずみがおか幼稚園教頭 伊東桃代先生の5名の先生方に対し優秀教員表彰が贈られました。この表彰は、全国の私立幼稚園団体より推薦を受けた実践者に対し、日頃の実践に対する真摯な姿勢を称えるものです。「日頃の実践の積み重ねに光を当て、研究につなげる」という本学会の精神を示すものです。

続いての基調講演は、お二人の研究者による専門的なお話を伺うことができました。基調講演Ⅰでは、『グロー

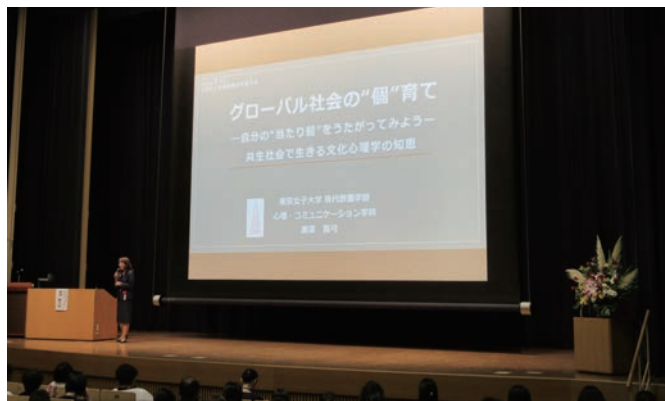


開会式

バル社会の中での「個」育て 一多様な文化的背景を持つ子どもに向き合うために、「当たり前」を見直してみよう』と題し、東京女子大学現代教養学部心理・コミュ

ニケーション学科教授の唐澤真弓先生より私たちが日ごろ何気なく考えてしまう「当たり前」に関し、新たな視点をお示しいただきました。基調講演Ⅱでは、『子どもとの対話につながる大人の対話』と題し、大妻女子大学家政学部児童学科教授の高橋ゆう子先生より、私たちの実践に欠かすことができない「対話」についてお話しいただき、考える時を持つことができました。

一日目の最後は研究者によるプレゼンテーションが行われ、研究者として参加した7名が持ち時間5分をめいいっぱい使い、二日目に行われる発表に対する思いを語



基調講演Ⅰ

られました。幼児教育を共に考える研究者の皆様の熱い思いで会場全体が包まれ、その熱気と共に一日目が終了いたしました。

学会二日目は、20の園の口頭発表と43の園のポスター発表が午前、午後の時間帯で行われました。二日目は、本学会の3つの柱を基に運営されていますので、本学会の特長がよく見える場であります。その3つの柱とは次の通りです。

- ① この学会で行う研究は、保育現場での実践を踏まえ、発表は事例を用いて、現場にフィードバックできることを念頭に研究会では参加者同士が活発に意見交換を行う
- ② 生きた研修のメイキングの仕方を学び、全ての園の園内研修の充実を目指す
- ③ 保育実践者と研究者が共に育ちあう

また、研究発表というと敷居が高く自分たちの日々の実践が研究になるのか、そのような心配を抱きがちですが、設立当初からの合言葉は「たどたどしく語る」こと。日々の実践こそが私たちの宝であるのですから、上手に話そうとするのではなく、たどたどしく語りながら共に

考えていく時間を創り、その先に発表園の、そして参加者の園の園内研修の充実があることを実感できる場が形成されていくことを感じられた方が多かったのではないのでしょうか。口頭発表においても、ポスター発表においても参加者自身が、協議の時間を通し、また発表者とのやり取りを行いますので、自身の保育実践と重ね合わせる時間を持つことでそれが宝物となり、明日からの保育実践へのヒントとなったことと思います。各会場からは熱心に語り合うその合間に、時に笑い声が聞こえるなど、

終始豊かな空気が流れていたように思います。

日々の「実践」は私たち保育者にとっては当たり前の日常ですので日々流れていくものですが、子どもたちにとっては一日一日が大切な生活であり、子どもたちの根っこを育む大切な日々です。各園での「実践」が自分たちの園のものだけではなく全国の先生方の「実践」と重なり、新たな実りとして全国各地での豊かな、そして質の高い保育となるように期待しております。



口頭発表



ポスター発表

「幼稚園・認定こども園キャリアアップ研修テキスト」を用いたオンデマンド研修再配信のお知らせ

中央法規出版株式会社より刊行している、当機構監修「幼稚園・認定こども園キャリアアップ研修テキスト」を用い、以下5分野のオンデマンド研修の再配信を行います。

●配信コンテンツ：「保健衛生・安全対策」「食育・アレルギー対応」「特別支援教育」「乳児保育」「マネジメント」

●申込期間：令和6年11月1日（金）10：00～令和6年11月25日（月）17：00

●視聴期間：令和6年12月13日（金）10：00～令和7年1月14日（火）17：00

研修内容等、詳細は右記QRコードかゆたかなまナビよりご確認ください。

※8月配信分の再配信となりますのでご注意ください。



私達は**衝撃緩和帽**の開発を通じて大切な子供達の未来を守ってゆきます！

ゴツン!! から、
まもってあげたい。

子どもの頭を守る帽子

この帽子痛くない！

企画・開発 **株式会社リード**

〒028-6104
岩手県二戸市米沢字家ノ139-1
<http://hot-anshin.com//index.php>

お問い合わせはこちら
アルファアテンド株式会社

TEL 070-5550-1982
FAX 042-673-2076
alpha.attend@gmail.com

遊具でふいに

地震でケラリ